民主香川
定価　月100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
３丁目13－14
☎(087)834-7311

香川・ウィメンズマーチを初開催　3月8日「国際女性デー」

高松市で8日、「国際女性デー」に合わせて、香川県内で初開催となるジェンダーや人権の平等を求める「ウィメンズマーチ香川」（同実行委員会主催）が行われました。

約80人の参加者は、高松駅から繁華街を行進し、高松三越前でリレートークをし、「わたしの名前はわたしが決める」など、自己決定権や連帯、デマやヘイトなどの差別や性暴力、反戦平和のコールを上げ、商店街を練り歩きました。

参加者は「SNSを見て政治に不安を覚えデモに参加した。ジェンダー平等を」（40代女性）、「女性が声を上げ権利のため行動を。人間らしく生きられる社会を」（60代女性）と述べました。

同実行委員会は、丸亀在住の中林愛理（24）さんの呼びかけに、1女性会議県本部、新日本婦人の会県本部、フラワーデモかがわ1の3団体が応じ、結成しました。

中林さんは「コールをいれたマーチも出来てみんな楽しそうで、（自身も）参加してすごくよかった。呼びかけに賛同してくれた団体や参加者の皆さんに感謝したい」と語りました。

白川参院議員招き、映画上映と意見交流
「女性の休日」を実現する香川の会

「女性の休日」を実現する香川の会は8日、高松市で映画「女性の休日」の上映会を開きました。日本共産党の白川容子参院議員を招き、意見交流をしました。

同実行委員長の中川和代香川県労連女性部長は「日本のジェンダーギャップ指数は主要先進国の最下位。ジェンダーに対する現場での課題を解決したい」と述べました。

白川氏は、来賓あいさつし、「とりわけ女性がジェンダー不平等の問題で生きづらくなっている。男性も男性らしく生きろと言われ苦しんでいる」と指摘し、「皆さんと映画を楽しみたい」と語りました。

映画上映後、白川氏と平和病院の原田真吾院長を囲んで、感想などを交流しました。

日本共産党の岡田まなみ高松市議も来賓で参加しました。

太鼓台

▼25年ぶりの岩手で主に宮沢賢治ゆかりの地を訪れました。盛岡の光原社は、生前に出版された唯一の童話集「注文の多い料理店」を農学校の同窓生二人の尽力で世に出された所です。売れなくて大変な赤字を抱えたそうですが、このことを誇りにして、後に民芸運動にも関わり、世界の民芸品を扱う店として今も続いています。▼花巻でも賢治の生き方に触れる場を巡りました。裕福な家庭に生まれ、学業も優秀でしたが、「注文の多い料理店」の姿だけ紳士、自己中心的で自然や命を軽く扱う都会人と正反対の生き方を貫きました。農学校の教師という安寧な生活を捨て困窮する農民を少しでも豊かにしようと農民と共に生き、「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」と童話の中で語ったとおりに生きた人です。▼世界で戦争を起こしている政治家やその背後で金儲けをし、人命や自然破壊を軽く扱う人たち。対極にある賢治の作品や生き方を多くの人に知ってほしいです。（こ）

民医連がストライキ

【3面から】　政権に立ち向かい、民主的な税制・税務行政の確立へ力を合わせようと訴えました。また、日本共産党の白川ようこ参議院議員からも激励のメッセージが寄せられました。

香川民医連労働組合は12日、高松市の高松平和病院前で「安心安全なケアを提供したい」賃上げや人員の増加などを訴え、約40人が参加するストライキをしました。

ストライキでは6割の医療機関が経営難で病院や病棟の閉鎖が相次ぎ、県内でも数少ない無料低額診療を行う高松平和病院でも物価高騰や人件費高騰に対応できず、「人員不足、過重労働や離職」の負の連鎖があるとし、地域医療の崩壊の危機を訴えました。

現職の薬剤師や介護士、連帯する団体らの代表者がリレートーク。「私たちの行動は、争いではなく患者さんや命と医療を守るための最後の訴えだ」「（医療職は）病院の赤字を理由に、ボーナスは削られ実質的な賃上げがない」「社会保障抑制政策でケア実践が出来ない、人手が足りない、処遇が低すぎるという異常が常態化している」などと訴えました。

日本共産党の岡田まなみ藤沢やよいの両高松市議が連帯あいさつしました。

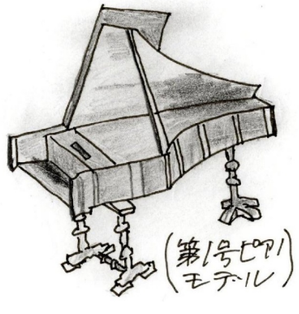
集会後は、参加者が長尾税務署に確定申告書を集団で提出しました。このほかにも、3月10日丸亀、12日小豆島と観音寺、13日高松と坂出の5税務署管内でも同統一行動を実施しました。

随筆　猫のしっぽ　白方 微風

ベートーベンの耳

現役耳鼻科医が書いたコラム「ベートーベンと難聴」を読んだ。彼は進行性の難聴が二〇代後半から両耳に発症、三〇代後半には高度難聴に至り、四〇代にはほぼ耳が全く聞こえなくなったが、他界するまで約三十年間も作曲を続けた。中途失聴者だから聞こえていた時の記憶は脳内に残る。その膨大な音のサンプルを引き出し、合成して譜面上に書きだした。（二〇二三年十二月出版の新書「耳は悩んでいる」コラム4）幼い頃から豊かな音楽環境で育ったので脳内には沢山の音が蓄積されていただろう。

では彼が創ったのはどんな音だったか。著名な音楽評論家の吉田秀和氏は、「『ああ、美しい！』と言いたくなるような響きとはまるで違う音…それを聴くと途端に目をさまして、注意深くあたりを見回したくなるような音」と表現する。ヨーロッパ文化史が専門の小宮正安氏は、有名な「第九」に関して、唯一無二の美しい響きを信条としている……ウィーンフィルが、時にあえて耳障りな音を出す」作品と、記す。文学博士の岡田暁生氏は、聴いてすぐ美しいと思えるようなものではない。誰でも考えつきそうな凡庸ものでさえある……それを研究し、組合せ、積み上げて完成したと、述べる。



ベートーベンは難聴で音が全く聞こえず、脳内の記憶だけで「耳障りな音」を生み出したのだろうか。彼の為に補聴器や共鳴版付きの特性ピアノが提供された。演奏会では指揮をした。

最新の研究成果を取り入れた著書で先に紹介した小宮氏が言う。「第九」初演の指揮をした時、曲の進行に合わせてきちんと楽譜を繰っていたとの女性合唱団員の証言があるから、彼の耳はそれなりに演奏を聴き分けられる状態にあったことになる。